

2009年度 修士論文

バスケットボール指導者の考える理想の指導に 関する質的研究

A Qualitative Study on the Ideal Coaching
Thought by Basketball Coaches

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 コーチング科学研究領域

5007A007-2

伊平 遼一

Ihira, Ryoichi

研究指導教員： 堀野 博幸 准教授

目次

．緒言	1
1．バスケットボールにおける指導者の重要性	
2．質的研究という方法論	
3．質的研究の歴史	
4．研究目的	
．方法	4
1．研究対象	
2．実施期間	
3．調査方法	
1) インタビュー	
2) インタビュー—データの文字起こし	
3) 意味単位の抽出	
4) カテゴリー作成	
5) 概念図の作成	
6) 分析データの信頼性確保	
4．倫理的配慮	
5．分析工程	
．結果	8
1．現在の指導	
1) 選手・チームの意識	
2) 指導者の意識	
3) 育成環境	
2．理想の指導	
1) 選手に求めること	
2) 指導者が自身に求めること	
3．乖離を生む要因	
1) 不可避な事象	
4．カテゴリー概念図	
．考察	22
．今後の課題	25
．引用文献	26
参考資料（インタビューガイド）	29

．緒言

１．バスケットボールにおける指導者の重要性

アメリカで発祥したバスケットボールという競技は全世界へと広まり、人気を集めている。アメリカのプロバスケットボールリーグ・NBAは世界最高峰のリーグとして、世界各国から選手が集まり、大きな盛り上がりを見せている。日本人バスケットボールプレイヤー田伏勇太選手は、2004年に日本人初のNBAプレイヤーとして、世界の舞台で活躍した。2005年に、日本国内でもプロバスケットボールリーグ・bjリーグが開幕し、日本のバスケットボール人気も高まってきている。しかしながら、国際レベルでは日本選手の実力は高いとは言えず、オリンピックをはじめ世界大会では、予選で敗退している。日本のバスケットボールにおいては、世界で戦える選手の育成が求められる。

選手の育成過程を見ると、現在、日本の育成年代のバスケットボールはクラブチームがほとんど存在しておらず、学校部活動が育成現場となっている。学校部活動のチームを監督する指導者は、日本のバスケットボールにとって非常に重要な役目を担っていると言える。アメリカではバスケットボールのコーチングについて多くの研究が行われている(Bloom, 2006 ; Fizel & D'itri, 1996 ; Gallimore & Tharp, 2004)。しかしながら日本のコーチングについて、二杉(2006)は「スポーツにおけるコーチング方法の重要性について、アメリカを中心にその研究が進められ、数多くの実証例によって証明されてきた。にもかかわらず、我が国のスポーツ界では、未だに精神性、いわゆる根性論が幅を利かせており、コーチングの方法の重要性を理解していない場合が数多くみられる」としている。このことから日本では、競技力向上におけるコーチングの重

要性とコーチングに関する研究が軽視されているようである。バスケットボールの指導者について研究をすることで、得られた情報を指導者の能力向上に役立たせることが出来、強いては日本のバスケットボールの競技力向上にも貢献できるだろうと考えた。

2 . 質的研究という方法論

質的研究とは、日本国内ではまだあまり認知されていないが、海外、特にヨーロッパや北米では以前から心理学や社会学の分野で多く用いられてきた研究方法である。Denzin & Lincoln (2000) によると、この研究は数、量、強度、頻度などによっては実験的に検証や測定ができないモノの質や過程、あるいは意味を重視している方法である。モノの質や過程あるいは意味を重視するということは、人間や社会の数値に表せない部分を研究対象とするものであり、スポーツ指導者の考えや理念を研究の対象とすることが出来る。近年日本でも、看護学の分野で特に注目され始め(上野、2004)、その必要性が唱えられている。その方法論は仮説生成型の研究と言われており、新しい領域について研究する場合や数で表せない事象に対して用いられる手法である。本研究は、日本のバスケットボールの指導というあまり研究が進んでいない分野と、指導者の考えを扱うことから、この手法が適していると考えた。

3 . 質的研究の歴史

質的研究には様々な手法があり、様々な分野で扱われている研究方法である。その方法や対象は多岐に渡る。質的研究は社会学から生まれた研究方法であり、新しい社会や文化を対象とする時に用いられた。

スポーツ心理学の領域では、Martens(1987)が従来の実験的研究方法

を批判し、対象者との関わりを持ち、インタビューなどによって経験的な情報を引き出す研究法にスポーツ心理学の新たな方向性を見出した。Culver, Gilbert & Trudel (2003)によると、それをきっかけに 1990 年以降スポーツ心理学に質的研究が増えていった。

Cote, Salmela, Baria & Russell (1993)は社会学で提案された継続的比較法をもとに、スポーツ心理学における質的研究方法の一つを確立した。Cote, Salmela, Trudel, Baria & Russel (1995)はその手法を使い、17名の体操競技のエキスパート指導者のコーチング・メンタルモデルを明らかにした。

Culver et al. (2003)によると、コーチングに関する質的研究は Cote et al. (1993)の手法をモデルにするものが最も多い。Thelwell, Weston, Greenlees & Hutchings (2008)は、この手法を用いて指導者が活用する心理的スキルについて調査した。日本では北村・齊藤・永山(2005)がこの研究方法を基に、優れたサッカー指導者のコーチング・メンタルモデルを明らかにした。本研究も指導者の考えを対象とするため、この方法が適していると考えた。

4 . 研究目的

本研究は以下の二つを目的として、指導者を対象にインタビューによる質的分析を行った。

第一に、競技成績が優れた高等学校バスケットボールチームの指導者が理想と考える指導を明らかにすることであり、第二に、理想の指導と現在の指導の乖離にはどのような要因があるのかを検討することである。

．方法

1 ． 研究対象

高等学校のバスケットボール部で監督として選手の指導を行っている
4名の指導者を研究対象とした。研究対象者の選定は、

- ・バスケットボール指導者としての指導歴が10年以上
- ・指導したチームが高等学校バスケットボールの全国レベルの大会に
過去3年間で3回以上ベスト4入りしている

という基準で行い、4名の指導者はこの基準を満たしている。また、この基準を満たすチームは全国で7チームのみである。選定理由は、先行研究(北村ら、2005；永山・北村・齊藤、2007)を参考に実現可能性を踏まえて決定した。

対象者は全て男性で、3名は私立高校、1名は公立高校の部活動の指導者であった。3名がその学校の保健体育の教師として勤めており、1名は外部指導員として指導にあたっている。対象者の平均年齢は51.8歳であり、バスケットボールの平均指導暦は30.2年であった。

2 ． 実施期間

2009年10月から12月の間に行った。

3 ． 調査方法

本研究はインタビュー調査で得られたデータをCote et al.(1993)による質的データ分析法を参考に行った。手順は以下の通りである。

1) インタビュー

調査は 1 対 1 の半構造的、深層的、自由回答的インタビューにより実施した。またインタビューの全体的な流れを示したインタビューガイドを事前に作成した。インタビューガイドは Smith (1995) が推奨する方法を参考に筆者が作成し、事前に模擬インタビューを実践して、その精度を高めた。インタビューの内容を理解してもらうために、事前にインタビューガイドを研究対象者に提出した。インタビューは原則としてインタビューガイドに沿いつつ、インタビューの流れに応じて追跡的質問と深層的質問を加えて、柔軟に対応しながら行われた。インタビュー実施者が答えを誘導するような質問にならないように配慮した。インタビューは筆者自身の実施し、対象者が所属する学校の面談室、教員室等で行われ、平均時間は約 60 分であった。インタビューの内容は、対象者に許可を得た上で全て IC レコーダーに録音した。

2) インタビューデータの文字起こし

インタビューによって得られたデータをインタビュー終了後、直ぐさま筆者自身が、IC レコーダーの音声から word ファイルに文字起こしを行った。

3) 意味単位の抽出

[現在の指導で大切にしていること(以下、現在の指導)]、[研究対象者が理想とする指導(以下、理想の指導)]、[その理想の指導が実現できない要因(以下、乖離を生む要因)]の3点の分析テーマを基に、文字起こししたインタビューデータから、1つ以上の概念あるいは見解を含む意味単位(meaning unit)を抽出し、それぞれに標題(tag)をつけた。この作業は、練習を撮影したビデオデータ、練習観察時のメモを参照し、

会話の前後関係を考慮しながら行われた。

4) カテゴリー作成

全ての意味単位の標題同士を比較し、類似した意味を持つ意味単位を集めて、サブカテゴリーとして括った。それぞれのカテゴリーにも標題をつけた。サブカテゴリー同士を比較し、そこに類似点が発見できれば、さらに上位の大カテゴリーへと括った。インタビューデータと練習観察時のメモを参照し、会話の前後関係を考慮した上で作業を行った。

5) 概念図の作成

編成されたカテゴリーは、新しいカテゴリーの再編成やカテゴリー同士の関係性がそれ以上見出せなくなるまで検討した。カテゴリー群の関係性を概念図に示した。

6) 分析データの信頼性確保

本研究は、以下の3点によって信頼性を確保した。第一に、インタビューの方法を半構造的にすることで、対象者への質問の均一化を図った。第二に、インタビュー前後に練習現場の観察を行い、内容をメモに取った。その情報をデータ分析時に活用することで、より精細な分析が可能となった。第三に、筆者によって抽出された意味単位・編成されたカテゴリー群の妥当性を確保するために、意味単位の抽出の段階から質的研究に精通する研究協力者3名によって分析内容が検証された。

4. 倫理的配慮

インタビュー対象者には、研究の趣旨、匿名性の確保を説明した上で、

研究協力の承諾を得た。

5．分析工程

インタビューを実施する前に、研究対象者が指導するチームの練習を数回観察した。練習の種類・指導者の言動に注目して、それらを筆者自身がメモに記述した。また練習前後にも対象者と行動を共にし、指導・選手・学校についての話を聞き、それらもメモに記述した。インタビュー実施時にはそれらを質問項目に反映させて、より深く対象者の考えを引き出すように努めた。また、撮影の許可を得たチームにおいては、ビデオカメラによって練習風景を撮影した。撮影した映像と記述したメモは分析の段階で再確認し、データ分析に活用した。意味単位の抜き出し、カテゴリーの作成は、解釈可能性を考慮して分類した。

． 結果

分析の結果、本研究の対象となる 109 の意味単位が抽出された。これらの意味単位は、[現在の指導]、[理想の指導]、[乖離を生む要因] の 3 つの分析テーマから得られた。以下、文字起こしした発話データに基づいて、それぞれの分析テーマで内容を検討していく。

1. 現在の指導

[現在の指導] の分析テーマにおいて得られた意味単位は、技術・体力、戦術、人間性、計画的練習、指導スタイル、コミュニケーション、教育、及び蓄積の 8 つのサブカテゴリーに分けられた。これらは最終的に、《選手・チームの意識》、《指導者の意識》及び、《育成環境》の 3 つの大カテゴリーに分類された（図 1）。

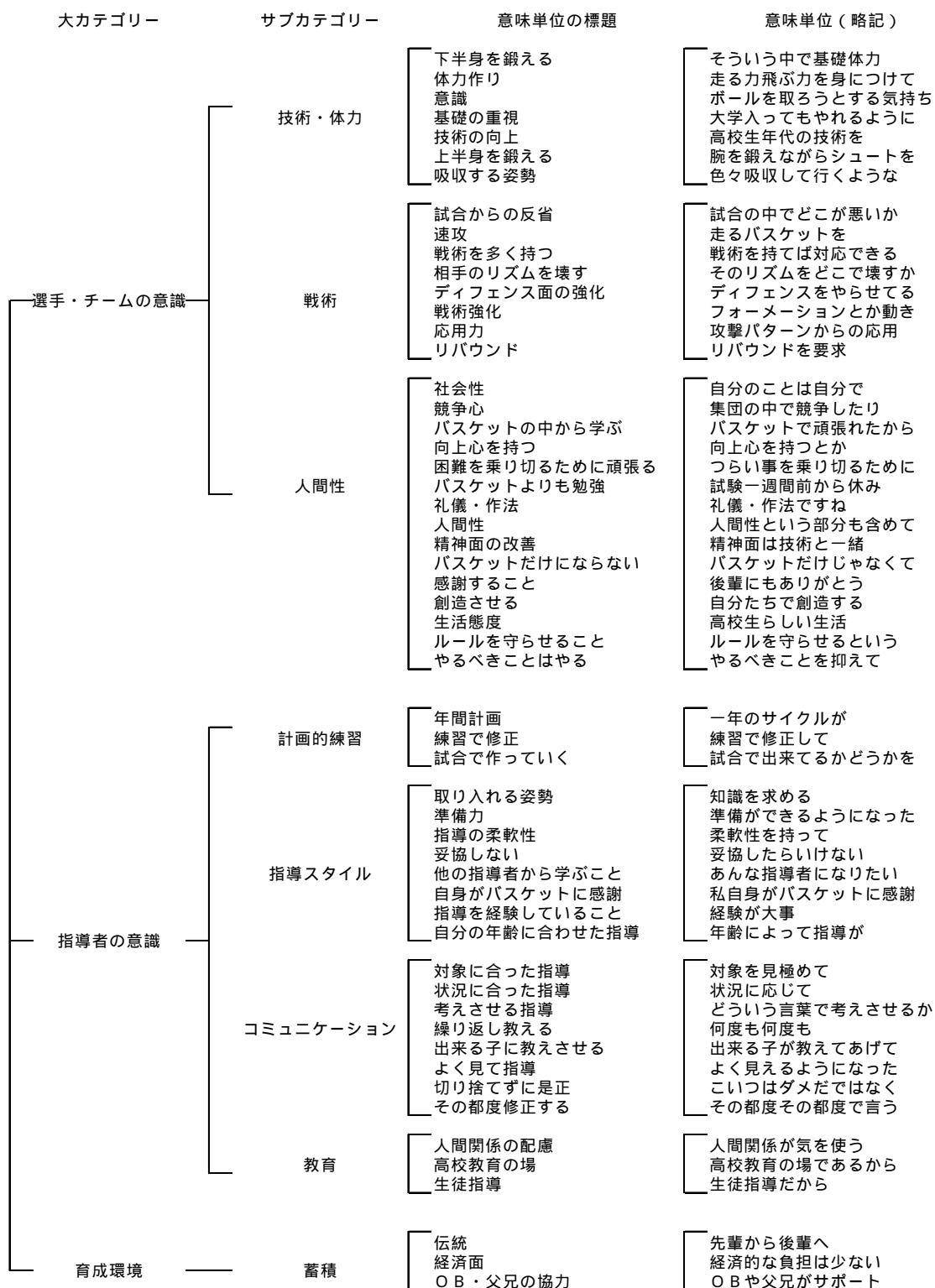


図 1. [現在の指導] の階層的カテゴリー一覧

1) 選手・チームの意識

この大カテゴリーは、技術・体力、戦術、人間性の3つのサブカテゴリーから構成される。これらは指導する際に、選手とチームに対して意識させる点として形成された。

技術・体力について、ある指導者は次のように述べている。

「上半身、特に腹筋・背筋。走ることで下半身は鍛えられますから、

上半身を鍛えてシュートを打たせるということですね(指導者A)。」

バスケットボールでは、基礎体力が重要であると指摘し、練習で強化している。このような、個人の技術や体力についての意味単位が、このサブカテゴリーに括られている。

個々の能力が強化されていく上で、チームの戦術に意識を向けさせている。この戦術についてある指導者は次のように述べている。

「柱となる戦術というものをたくさん持てば持つほど、相手に対応

できるわけだから(指導者B)。」

試合で対戦相手を破るためには、多くの戦術を持って挑むことの重要性を強調している。それぞれのチームの武器となる戦術を、選手に身につけさせている。

また、指導者は選手のバスケットボールの能力を高めていくだけでなく、選手の人間性の向上も同時に考えている。この人間性についてある指導者は次のように述べた。

「子どもたちにもバスケットができて、強ければ何もいらんじ

ゃなくて、むしろバスケットをさせてもらってる、学校であったり

親に対して、しっかり感謝をしてほしい(指導者C)。」

バスケットボール選手として成長していく過程で、人間性も伸ばすような指導が行われている。選手に以上のことを意識させるには、選手と

関わる指導者にも必要な要素がある。その要素が次に述べる《指導者の意識》のカテゴリーにまとめられた。

2) 指導者の意識

この大カテゴリーには、指導者自身が指導の際に意識している項目として、計画的練習、指導スタイル、コミュニケーション、及び教育の4つのサブカテゴリーに括られた。

計画的練習は、これまでに経験した内容を基に年間計画を立て、いかにその計画通りに練習を進めるかを意識している。これについてある指導者は次のように述べている。

「一年のサイクルがだいたい頭の中に入ってるから、その計画っていうのが、体に染みついてきてるし、分かってる（指導者D）。」

一年という期間の中で計画的に指導を進めていくことを説明している。一年間の指導をしていく上では、指導者自身がどのようなスタイルで指導に当たるかという事も重視している。

指導スタイルについてある指導者は次のように主張している。

「指導者っていうのは妥協したらいけないと思うんですよ、絶対に（指導者A）。」

指導者が信念を持って指導していることが、このカテゴリーに整理されている。

選手と関わる時は、その信念を基にコミュニケーションの取り方が選択されていく。選手との関わり方についてある指導者は次のように考えている。

「その時その時。置いとかないで、まあいいかってならないで。思ったこと感じたことは溜めて置かないで。それ溜めとくとこっちが

ストレスになるからさ。嫌なことでもハッキリ言おう言おうっていう方かな（指導者D）。」

また、バスケットボールチームとしてだけでなく、高校生の集団であることも、意識されている。

教育 についてある指導者は次のように述べている。

「新入生が入ってくるとなったら、まず1年生にトラブルはないか、寮生活、まず生活になれないと。いつもそれが一番まずい。夏まで気を使う（指導者D）。」

このように、選手を指導していく上で指導者自身が意識していることがこのカテゴリーに含まれている。指導者と選手がそれぞれ意識すべき点がまとめられた。これらの点をサポートする要素として、次の《育成環境》のカテゴリーがまとめられた。

3) 育成環境

この大カテゴリーは 蓄積 の1つのサブカテゴリーで構成されている。蓄積はチームが存続して来た過程で生み出され、築かれ、残されてきたものを指す。これについてある指導者は以下のように語った。

「教えてもらったりね。チームにいる先輩に教えてもらったり、そういうところが、一つの、簡単にいえば伝統という部分（指導者B）。」

トップレベルのチームは、先輩たちが長年積み上げてきた伝統がチームを支えていることを指摘している。伝統を意識し、維持しながら、指導者はチームを作り上げている。

2. 理想の指導

[理想の指導] の分析テーマによって抜き出された意味単位は、技術・戦術の改善、人間形成、及び指導能力向上の3つのサブカテゴリーに分類された。これらのサブカテゴリーは、[現在の指導] の分析テーマで抽出されたカテゴリーと対応する形で、《選手・チームに求めること》及び《指導者が自身に求めること》の2つの大カテゴリーに分類された(図2)。

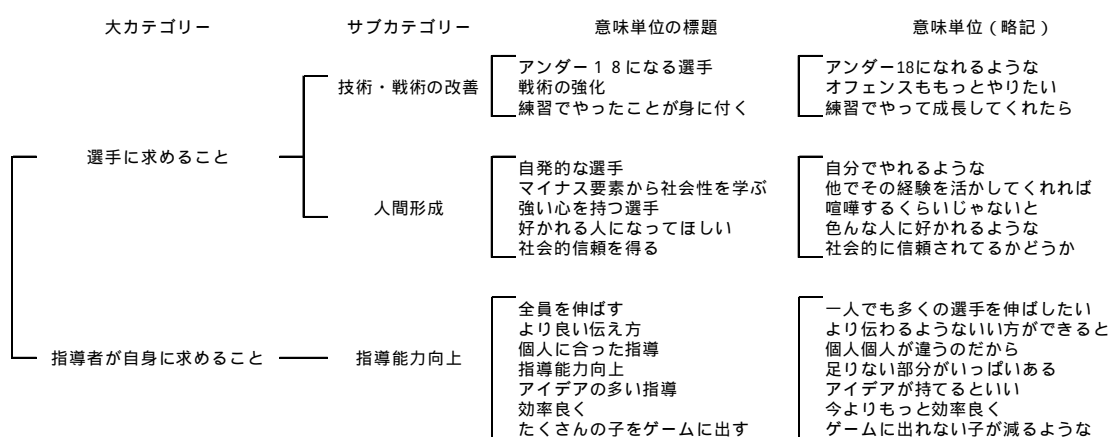


図 2. [理想の指導] の階層的カテゴリー一覧

1) 選手に求めること

この大カテゴリーは指導者が選手に求めていることについてまとめられた。技術・戦術の改善 及び 人間形成 の 2 つのサブカテゴリーで構成されている。

技術・戦術の改善 についてある指導者は次のように述べている。

「ディフェンスはもちろんだけど、もうちょっとオフェンスをね、オフェンスもきちっとね（指導者 A）。」

このチームはディフェンスを重視してチームを作っているが、オフェンスも強化して行くことを目指している。今ある技術・戦術を更に増やしていくことを理想として挙げている。

また、[理想の指導] においても人間性に関する項目として 人間形成 を求めるカテゴリーが抽出された。これについてある指導者は次のように述べている。

「いろんな人に対して好かれる人というか、強くて、勉強もできて、いい子で、みんなに好かれるというのが大事かなって思ってる（指導者 C）。」

[現在の指導] の分析テーマでも抽出されたように、バスケットボール選手としての成長と同時に、人間としての成長を目標としている。《選手に求めること》を達成するために、自分自身を改善し目標へ向かうことに関する意味単位が次の《指導者が自身に求めること》のカテゴリーにまとめられた。

2) 指導者が自身に求めること

このカテゴリーは 指導能力向上 の 1 つのサブカテゴリーで構成されている。指導者は自身の指導力が絶えず向上して行くことを理想とし

ている。これについて、ある指導者は次のように語った。

「3年たってもあんまり伸ばせられなかったなっていう選手がいるよね。ある程度大学で活躍するためには、フィジカルの面であったり、技術の面が必要なんだけど、全員をそういうレベルにしたい（指導者B）。」

多くの選手を抱える指導者にとって、一人でも多くの選手を成長させることが理想であると述べられている。また別の指導者は次のように述べている。

「やってる二時間のことがもっと集中出来るようにしたい（指導者C）。」

現状よりも効率の良い練習を一日でも多く行いたいという指導者の理想が浮かび上がった。

3 . 乖離を生む要因

指導者が考える〔現在の指導〕と〔理想の指導〕に関する意味単位を抽出したが、最後に、第三の分析テーマ〔乖離を生む要因〕に基づいて抽出された意味単位は、時間の制約、人数の制約、及び年齢的問題の3つのサブカテゴリーに分類された。それらは《不可避な事象》という1つの大カテゴリーに括られた（図3）。

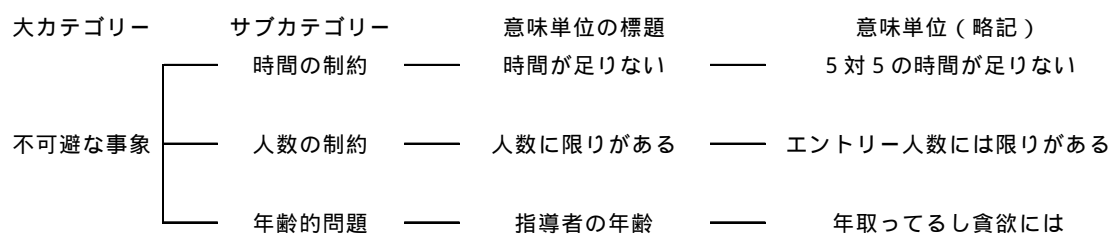


図 3. [乖離を生む要因] の階層的カテゴリー一覧

1) 不可避な事象

時間の制約 のサブカテゴリーでは、学校部活動で行われているチーム練習には時間に限りがあることが、現在と理想の指導の乖離を生む要因となっている。この点についてある指導者は次のように述べている。

「5対5の時間が少ないかなって。時間がめちゃくちゃあるわけではないからね（指導者A）。」

チームを強化していく中で修正点が数多く出現するが、それらを全て練習するだけの時間がないということが理想の指導ができない要因だとしている。

時間と同様に 人数の制約 では、機会にも限度があることが、乖離を生む要因の1つとして挙げられた。これについてある指導者は次のように述べている。

「全員が選手になれるわけでもないし。限られたエントリー数のわけだから。試合で経験を積めるかどうかというのは、3年間では非常に大きい（指導者B）。」

これは、スポーツする上では避けることの出来ない要因として挙げられた。

また、年齢的問題 も現在の指導と理想の指導との乖離を生む要因として挙げられた。この点についてある指導者は次のように述べている。

「年取ってるし、貪欲に調べたりはしないけどね（指導者B）。」

年齢の関係で、以前ほど指導改善に対しての意欲がなくなっていることが指導者自身の問題とされた。

4 . カテゴリー概念図

以上の分析で得られた大カテゴリー、サブカテゴリーをそれぞれ比較し、そこに含まれる意味単位も考慮した上で関連性を捉え、分析テーマである[現在の指導]、[理想の指導]、及び[乖離する要因]についてカテゴリー同士の関係性を図式化した(図 4)。

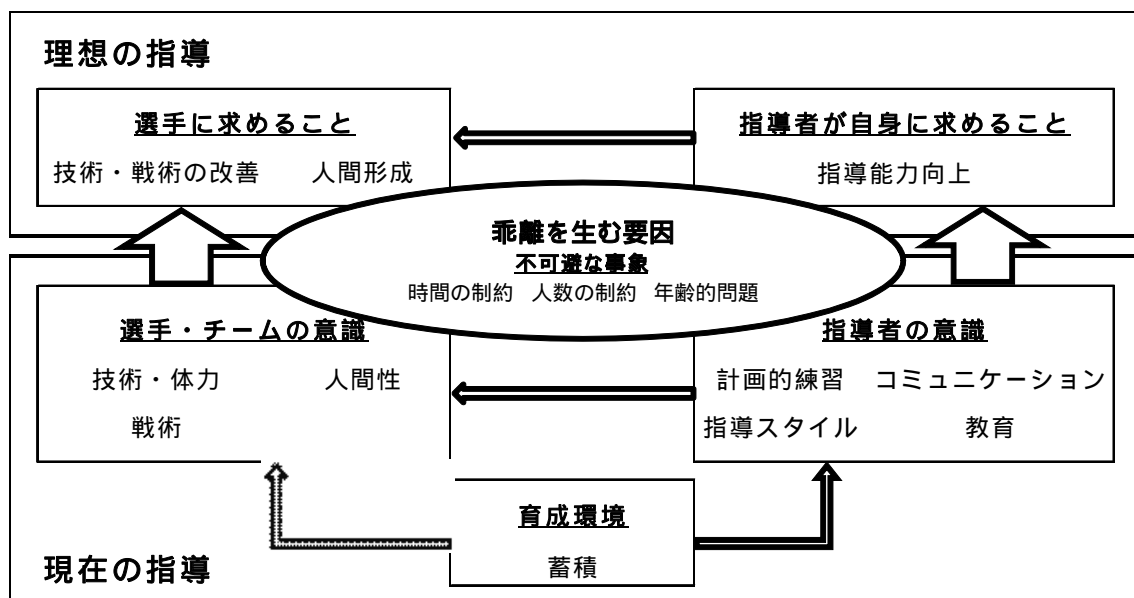


図 4 . カテゴリーの関係性を示した概念図

． 考 察

現在の指導と理想の指導との乖離を生む要因に、《不可避な事象》というカテゴリーが抽出された。このカテゴリーは指導者自身では解消することが困難な要素が括られている。また指導者Cの「けっこう満足はしてるんですけどね。」という発言から、競技力の高いチームの指導者は現在と理想との乖離が小さいということが考察される。これらのことから、日本の高等学校トップクラスのバスケットボールチームは国内での競技成績を重視していると捉えることが出来る。今後、一層国際的なレベルアップを図るためには、倉石(2005)や笈田(2003)が指摘するように、指導者自身が世界大会などを視察し、世界のバスケットボールを視野に入れる必要があることが示唆された。

本研究では、現在の指導と理想の指導との乖離を生む要因の1つに、時間の制約が抽出された。これは選手が高等学校の生徒であるため授業によって練習時間が限られていること、指導者に学校の教員としての職務がありチームのために費やせる時間が限られていることが理由となっている。選手は高等学校の部活動としてバスケットボールを行っているので、現状以上に練習時間を確保することは困難であり、無理に練習時間を延長しても選手のプレーや練習に対する集中力が低下することに繋がってしまうであろう。しかし、指導者側には改善の余地があると考えられる。ある指導者は時間的問題について「日本の指導者はヘッドコーチだけど、アシスタントコーチのこともマネージャーのことも、チームマネジメントを全部しなきゃいけない(指導者C)。」と語った。こうした発言で、日本の高等学校バスケットボールチームでは、指導者1人に対する負担がいかに大きいかが分かる。各チームが1人、また多く

とも2人の指導者で指導を行っていることから、複数の指導者で分業することでその負担を軽減し、1人の指導者がチームに費やす時間が確保できると考えられる。二杉(2006)も、コーチングにはアシスタントコーチやトレーナー、マネージャーといったチームスタッフの存在が不可欠であることを示しているように、本研究でも高等学校のバスケットボールチームが更に強くなるためには、多数のスタッフで指導する必要があると考察された。

本研究では、高等学校バスケットボールチームの指導をする上で、高校生の人間形成が重要であるとして、それに関する意味単位が[現在の指導]と[理想の指導]の両方で抽出された。そして、競技力の高いチームの指導者がバスケットボールの指導の中で、同時に人間教育を行っていることが明らかになった。これは対象者の4名中3名が保健体育科の教員として、学校に勤めていることも関係していると考えられる。Cote et al. (1995) や北村ら (2005) の研究では、育成年代でのエキスパート指導者はパフォーマンス向上と同時に、スポーツを通じた人間形成といった教育的なプロセスを重視していることが示されている。競技成績の優秀なバスケットボールチームの指導者も同様の理念を持っていることが示唆された。

本研究の対象である4名全ての指導者が指導能力の改善の為、他の指導者から学ぶことが重要であると考えている。このことはスポーツ指導者の自身の指導力改善手段としては注目すべき点ではなかろうか。指導者Dの「まだまだすごいなって思う指導者はいっぱいいるから、それを、直接話せないけれども、どう考えてるのかなとか。ゲーム見てて、こういう事指導してるのかって。それを、日々っていうか常に頭に置きながら、いいものは取り入れたほうがいいかなって感じる。」という言葉から

も、自身の指導について試行錯誤し、他の指導者からその手掛かりを得ていることが分かった。研究対象となった4名の指導者が自身の指導を改善しようと、練習内容や指導方法を工夫している。その方法について指導者Cも「Xさん（先輩指導者）と出会って、30代後半から今に至る中で、僕自身はすごく変わってきてる。」と述べ、指導改善には他の指導者との関わりが重要な要因であると理解される。

サッカー指導者を対象とした北村(2004)と北村ら(2005)の研究と、バスケットボール指導者を対象とした本研究の結果を比較するといくつかの類似点が見受けられた。その類似点は、選手の年代を考えた指導を行うこと、選手自身に考えさせること、環境を整えることが挙げられた。種目が異なる場合であっても、育成年代の捉え方や、スポーツにおける環境の重要性は同様の意味合いを持つことが示唆された。

． 今後の課題

1. 乖離を生む要因

競技成績の優秀なチームの指導者を対象としたため、現在の指導と理想の指導との乖離を生む要因があまり表れなかった。乖離を生む要因についてより深く研究していくには、競技レベルを変えて調査を行うことが必要と考えられる。

2. トップレベルの指導者の特殊性

トップレベルの指導者はそれぞれに特殊性や個性を持っていると考えられる。その特殊性を明らかにするには、複数の指導者を対象にするのではなく、Andrea & Wrisberg (2008) の研究のように、ある特定の条件を持つ一人の指導者に対して深層的な研究をすることで、トップレベルの指導者の個性が明確になると考えられる。

. 引用文献

- Andrea J. B. & Wrisberg C. A. (2008) Effective coaching in action: Observations of legendary collegiate basketball coach pat summit. *The Sport Psychologist*, 22, 197-211.
- Bloom G. (2006) You haven't taught until they have learned: John wooden's teaching principles and practices. *The Sport Psychologist*, 20(2), 246-248.
- Cote J., Salmela J. H., Baria A. & Russell S. J. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data. *The Sport Psychologist*, 7, 127-137.
- Cote J., Salmela J. H., Trudel P., Baria A. & Russel S. (1995) The coaching model: A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 17(1), 1-17.
- Culver D. M., Gilbert W. D. & Trudel P. (2003) A decade of qualitative research in sport psychology journals: 1990-1999. *The Sport Psychologist*, 17, 1-15.
- Denzin N. K. & Lincoln Y. S. (2000). *Handbook of qualitative research*. Thousand Oaks, California : Sage Publications. (デンジン N.K. & リンカン Y. S. 平山満義 (訳) (2006) . 質的研究ハンドブック 北大路書房)
- Fizel, J. L. & D'itri M. (1996) Estimating managerial efficiency: The case of college basketball coaches. *Journal of Sport Management*, 10, 435-445.

- Gallimore R. & Tharp R. (2004) What a coach can teach a teacher, 1975-2004: Reflections and reanalysis of john wooden's teaching practices. *The Sport Psychologist*, 18(2), 119-137.
- 北村勝朗 (2004) 「教育情報」の視点による「コーチング」論の最高～ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として～. 教育情報学研究, 2, 71-80.
- 北村勝朗・齊藤茂・永山貴洋(2005)優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか？ - 質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築－. スポーツ心理学研究, 32, 17-28.
- 倉石平 (2005) 男子バスケットボール競技アテネオリンピック報告. スポーツ科学研究, 2, 29-50.
- Martens R. (1987) Science, knowledge, and sport psychologist. *The Sport Psychologist*, 1, 29-55.
- 永山貴洋・北村勝朗・齊藤茂 (2007) 優れた少年野球指導者の身体知指導方略の定性的分析. 教育情報学研究, 5, 91-99.
- 二杉 茂 (2006) バスケットボールのコーチングにおける事例研究(I) : 高校部活動の戦力強化について. 人文学部紀要, 26, 99-111.
- 笈田欣治 (2003) 日本におけるバスケットボール変遷史から見た日本バスケットボールの今後の課題について－考察－. 關西大學文學論集, 52(3), 77-93, 2003.
- Smith, J. A. (1995). Semi-structured interviewing and qualitative analysis. In Smith, J. A., Harre, R., & Langenhove, V. L. (Eds.) *Rethinking methods in psychology*. London: Sage, pp. 9-26.
- Thelwell R. C., Weston N. J. V., Greenlees I. A. & Hutchings N. V.

(2008) A qualitative exploration of psychological-skills use in coaches. *The Sport Psychologist*, 22, 38-53.

上野 栄一(2004)内容分析の歴史と質的研究の今後の課題．富山医科薬科大学看護学会誌，5(2)，1-18.

参考資料（インタビューガイド）

Q1 現在の指導で重んじていることはありますか？

Q2 その指導を行う上で上手くいっている点はどこですか？

Q3 その要因は何ですか？

Q4 現在の指導で上手くいっていない点はあるですか？

Q5 その要因は何ですか？

Q6 ご自身が理想だと思うまたは目指している指導はどんな指導ですか？

Q7 現在の指導は、その理想の指導にどれくらい近いですか？

Q8 現在の指導に達するのに、どのような経験が一番影響を与えましたか？

Q9 指導初級者、レベルの低い指導者は何が足りないと思いますか？